

全少静岡予選決勝視察レポート

報告者: CS 小林 公平 (湖西高校)

■分析対象:第36回全日本少年サッカー大会静岡県大会決勝

サルファス oRs VS アスクラロ沼津 2-0(前半 1-0、後半 1-0)

■試合の流れ

サルファスが丁寧にビルドアップをし、ボールポゼッションを高めゲームを支配した。幅と厚みのある攻撃でバランスを保ちながらパスを回すシーンが多く観られた。1点目はミドルシュート、2点目はDFが攻撃参加をし、パスワークから中央突破し、ゴールに至った。

■報告対象者:U-12,15,18 指導者

■試合分析からの考察

▶ディスカッション参加者 11 名

▽U-12 のトップレベルの現状

I. ポジション別の視点から

GK 身体能力は高くない → GK の選び方について再考が必要か。また、GK の専門的指導の必要性を感じる。

DF 1対1の守備力は高くない → 組織としてやられない意識は高いが、個の部分にまでDF意識が浸透していない印象。チャレンジする守備は少なかった。ビルドアップできるスキルのあるDFがいた。

MF ボール扱いがうまい選手が何人かいた。(特にサルファス)ゲームを打開する能力には欠ける印象。(ドリブル突破、スルーパス、プレッシャーの中でのパス)

FW チームとうまく関わりながらゴールを目指すプレーが多くみられた。FWのシュートシーンが少ない。

II. 技術的課題の発見と分析

① 1vs1のスキル

攻守にわたりもの足りない印象を受ける。チーム意識の向上に伴い、個へのフォーカスの希薄さを感じた。

② プレッシャーの中での技術

特にバイタルエリアで手詰まりになるシーンが目立った。このエリアでの技術とアイデア、スピードの変化などをさらにTRに落とし込む必要性があるのでは。

③ 中・長距離のキック

シュートを含めて、中・長距離のキックのトレーニングの必要性を感じた。

④ アスリートスキル

コーディネーション、ステップワークなどこの時期に獲得すべきスキルをさらに伸ばす必要性を感じる。(専門的指導力と多様な動きづくり)

III. 戦術的課題の発見と分析

▶チームシステムの運用と柔軟性

決勝に進出した両チームは終始チームとしてのバランスを保っていた。しかし、ポジションに縛られないサッカーの動き、ゲームの流れに合わせた選手自身の判断を認め、ゲームを動かすためのチャレンジをさせることの必要性を感じる。また、選手に考え、実行する裁量を与えることも必要か。もしくは、オプションとしてチャレンジをするためのプレーモデルをチームで共有できればさらによい。

▶チーム戦術の構築

サルファスはグラウンドを広く使ったビルドアップが目立った。GKがボールを持つと素早く選手が広がるのが印象的であった。聞くところによれば、バルサのVTRを観てイメージをつくらせているようだ。また、そのTRをしている印象を受けた。イメージを与え、共有させることでサッカーをさせようとするアプローチがみられた。

■トピックス

・U-12年代の選手の今後

今あるベースをこれからどう発展させてあげるかが重要である。今回決勝戦に残った選手たちをさらに上のステージで活躍させるために気づきを与えていくことの重要。そのための環境づくりがU-15,18年代の指導者に求められる。

また、今回決勝戦に残った選手が今後どういう選手になっていくかの追跡調査の必要性が挙げられた。また、U-18年代、もしくはプロとして活躍する選手はU-12年代でどのような選手であったかも追跡する必要性があるのでは。

・指導者のクオリティ

指導者のクオリティが選手、静岡県のレベルアップに直結することが今回のディスカッションでもあげられた。日頃の指導はもちろんのこと、分析・ディスカッションや情報、問題の共有化などの必要性があげられた。